



---

杉 山 忠 平 編

『自由貿易と保護主義』

—その歴史的展望—

法政大学出版局 1985. 10 x+234+vi ページ

---

わが国における経済学史研究の現役高齢者から40歳未満の若手まで8人、杉山忠平、津田内匠、小林昇、杉原四郎、服部正治、西沢保、熊谷次郎、玉置紀夫にA. W. コウツも加わっての共同研究の所産であって、各人1篇の論文がこの順序に並べられている。『自由貿易と保護主義』の内容はこの邦語の普通の意味よりも広い。フリー・トレードが独占貿易への参入の自由であった17世紀後半から、通商政策を超えた一定の社会観としてのフリー・トレードがその母国イギリスにおいても揺るがされる20世紀初頭にいたるまでの時期を対象とする、主としてはイギリスの経済思想の研究であるが、通史ではなく、それぞれの論文の独立性がつよく、各研究者が共通テーマへの参与を意識しつつ各自の研究の軌道上で書いた論文集であり、フリー・トレードと管理(統制、干渉)とってよいほどの内容である。総じて論文の質が高く、わが国における経済学史研究のひとつの前線を示す書物であり、教えられるところ極め多いが、各論文の独立性がつよいこともあって、書評者泣かせの書物でもある。片寄るおそれはあるけれども、紹介的叙述を端折って感想的批評を述べる他ない。

杉山は王政復古期と一部は名誉革命期にわたる諸文献をひろく検討して、S. フォートリ、J. ホウトン、フィランガスからR. コウクに至る過程で、トレードへの自由な参入という意味での独占批判および国家によるトレード規制への批判という2つの面をあわせもつフリー・トレード論が、時局的諸問題に触発されて多様に発現し、重商主義的思考と時代に制約されながらも、フリー・トレードの原型と称しうるものに達したことを主張している。杉山のこの主張は当然のことながら、スミスに至るフリー・トレードの系譜をトリー・フリートレーダーにみる説と名誉革命以降の産業保護主義にみるいわゆる固有の重商主義論に対する両面批判を指向する新説の提起である。杉山説は前者に対してはフリー・トレード論の原型成立期を遡らせ、かつフリー・トレードの意味規定においてより周到であり、後者に対しては学説がどのような資本あるいは地主利害を表現するかという関連の問題を一応絶っているところに特色がある。フォートリ等は現在のわたくしたちには馴染みがないけれども、マカロック(1824年)がとりあげていたり、ロンドン経済学クラブ刊行の復刻選集(1856年)に入れられたりしているから、杉山説は温古知新の面をもつのかも知れない。竹本洋の論文などをあわせ考えて、17世紀のイギリス経済学史研究が本格化してきたという感銘を受ける。

津田はイーデン条約の交渉経緯と結果をくわしく紹介

したあと、条約をめぐるフランスにおける論争を商工会議所の陳情書や全国三部会をめぐる文書を駆使して、条約推進の主役たるデュボン・ドゥ・ヌムールの自由放任とグルネ、フォルボネの「自由と保護」の思想とを、両者に共通な面を視野にいれつつ対照している。津田の第1次資料の卓抜な調査力が十分に発揮されていて、歯切れのよい行論と相俟って密度の濃い秀作である。この論文は諸産業の利害と政策的要請との関連を密着取材して、フランスにおける固有の重商主義をフランス大革命以前に遡らせるものとして受取られる面をもつが、その図式のなかに収める解釈は津田の本意ではあるまいし、じじつ保護と自由の微妙な絡みの分析がこの論文のメリットである。ただ、業界の悲鳴や訴えはオーバーに表現されるのが普通だから、条約による打撃の度合、凋落の原因を条約に全面的に帰する傾向については留保の必要などところがあるのではないかと思う。津田によってフランス経済学生成の多彩な形姿が明らかにされつつある。

小林論文は、J. ステュアート研究の一環であって、田島恵児のハミルトン体制研究を利用してアメリカにおけるステュアートにまで視野を拡げている。ハミルトン体制の基軸は保護主義ではなく公信用→国立銀行→紙幣制度の構想であったという田島の研究に接続して、小林はそこにハミルトンがステュアートにつながるゆえんを見る。小林はステュアートの経済学を「経済法則の把握の上に立つ、ステイツマンの広汎な管理の体系」と性格づけ、保護主義(リスト)の先駆とする解釈をナショナルリズムの不在と保護の主張がステュアートの全体系上において比較的微弱であるという理由で斥けている。小林のステュアート研究の歴史は長いが、『小林昇経済学史著作集』(ステュアート)以後の研鑽においてステュアート経済学の像が鮮明の度を加えてきたことは敬服の他ない。ステュアートとスミスの2つの経済学の、両者によって論争されなかった異質性・対抗が、後の経済学の歴史を大きく制約したという小林の大きな構想が、ステュアートそのものを読んでいない私にもそれなりに了解される説得性を帯びてきている。

小林はこの論文で固有の意味での重商主義論の要点を再掲し、重商主義という語を警戒して原始蓄積(期)の経済理論に換え、ステュアートを「原始蓄積の一般理論」と規定する自説の要点を再説している。この点に関して私見をあえて挟むと、固有の重商主義論はその使命をほぼ果し終えたと思う。固有の重商主義論の原型は大塚史学(の資本主義成立史論)の経済学史支店の観があり、それはそれとして成果を産んだのであるが、経済学の成立

史は理論形成史としての独自性をもたなければならないことは小林自身が説いてきたところであり、重商主義という語を原始蓄積に換えている小林のステュアート論は、固有の重商主義論の延長にではなくてむしろそれから離岸したところに成り立っている。「原始蓄積の一般理論」についていうと、私の気になるのは独立小商品生産の分解過程を理論的視野に入れていない理論が原始蓄積の一般理論の名に値するのか、分解過程が同時代のどの経済学者によっても理論的視野に入っていないとすれば(もちろん古くヘイルズやモアはエンクロージャーを問題した)、それはなぜか、理論にはならない重要な基礎過程があるということなのか、あるいはマルクスやウェーバーの資本主義成立史論に史実との大きなズレがあるのか、という諸点である。

杉原論文は J. S. ミル『原理』の第 5 篇の諸章を中心にして保護主義と植民論についての見解を検討し、ミルの思想の特色に注目するとともに、「自由貿易帝国主義」の政策思想として位置づける意図で書かれている。急ぐので問題点と感じたことだけを記すことを許してもらう。(1) ミルの「幼稚産業保護論」はかれの国際価値論と矛盾するのか否かは慎重に検討されねばならない。この点はミルの「原理」におけるリカードウとスミス(→ウェイクフィールド)的要素との問題でもあり、ミルにおける自由と国家干渉の問題にもつながる。(2) ミルがケアリの保護主義の主張のなかに含まれた首肯できる点を合理的に実現しようとして推奨するウェイクフィールドの植民論は、国家が植民地の地価を高くに設定して移民に土地取得を困難にさせ、移民に相当期間は賃労働者として働くことを余儀なくさせて、移植資本と結合させる政策であるから、国家による管理設計的な原蓄推進策であって、ケアリの意を実現するものではあるまい。(3) ミル独自の思想とされているもののなかには、リカーディアンに共有な思想が相当にあるのではないかと。世界的規模での資源の最適配分・効率の極大化は比較生産費説に含意されているし、また経済的進歩が知的・道徳的洗練の基礎であるという思想はマカロックなども主張しているなど。しかし杉原論文にはさらに展開さるべき重要な示唆が多くふくまれている。

服部論文は W. ジェイコブという経済の実情に詳しいエコノミストを中心にして、1814~30年代のイギリス農業の実態について多くの知識を提供していて、経済学史の講義において、講じる余裕はなくても心得ておくべきことがらを教えられた。西沢論文も同様で、1840年代におけるマンチェスター対バーミンガム、後者の産業保護

主義(国内市場主義)について知識をえた。ただし、この段階での反金本位制の主張は学史的に先駆的であるよりは当時の現実に対して空想的であると思われる。熊谷論文からはマンチェスター学派とその基礎について知らされ、リカードウ、J. S. ミルとの異同をより具体的に考える必要を感じた。玉置論文は西沢・熊谷両論文とも関連する発券銀行に関する論争史で、1840年代と1890年代をとりあげ、フリー・トレード対独占の一面の研究として位置づけられている。西沢論文についてと同じ疑問を感じたが、研究史上におけるこの論文のメリットの評価は評者の知識不足のためにできない。

コウツ論文は、フリー・トレードの母国イギリスにおいてそれが挑戦を受ける1880~1914年を対象としている。コウツは1903(-05)年の関税改革論争における経済学者の動向について、かれの1964年論文の後半部と1968年論文で詳論しているが、この論文は1880年代から筆を起していることと、政治的側面をひろく述べている点に特徴をもつ。マーシャル研究のために必要な知識をコウツは豊富に提供してくれている。この局面の歴史研究は相当におこなわれてきているのだが、経済学史としては H. W. マクリーディによるマーシャルの書簡公開(1955年)が最初で、その後はコウツの独占状態であると思う。コウツは経済学の社会史的研究を特徴としているので、コウツを吸収するとともに、この局面の経済学の体系の研究、ややひろくいえばミルからマーシャルへの研究が急がれる。わが国の経済学史研究が、経済学成立期に比べて19世紀末以降が手薄であることは本書においても明らかである。

[田中真晴]